

トマス・ネーゲルと剥奪説

佐々木 渉（山口大学）

現代の死の哲学では、なぜある人の死がその当人にとって悪いのかという問題が中心的課題となっている。剥奪説（Deprivationism, Deprivation Theory, Deprivation Account）は、ある人にとっての死の悪を「死がその当人から剥奪する未来の良い生」によって説明する立場である。剥奪説は、多くの哲学者の手を経て反事実条件的比較によって厳密に定式化されるようになり、現代では標準的地位を確立しつつある（e.g. Feldman 1991, Bradley 2009, Johansson 2013, Feit 2002, 2016, 2023, Timmerman 2019）。

このような剥奪説は、しばしばトマス・ネーゲルの「死」論文（Nagel 1970）にその起源があると参照される（e.g. Feldman 1991 p.206, Thieme 2023 p.248）。確かに、ネーゲルは、「もし、死が害悪（evil）であるとすれば、それはその積極的な特徴によることはあり得ず、ただそれが私たちから剥奪するものによってである。」という文言によって、一見すると剥奪説の基本となるアイデアを示しているように思われる。一方で、ネーゲルの同論文における他の記述や、ネーゲルの他の論文からは、死の悪に関するネーゲルの考え方は、現代の剥奪説とは異なる特徴をもつことがしばしば指摘されている（e.g. 谷川 2018, Timmerman 2019 p.245 n.7, Kamm 2020 p.28 n.19, Mitchell-Yellin 2024）。それゆえ、ネーゲル自身の考えと現代の剥奪説の関係は近年では

本発表では、剥奪説が本当にネーゲルに由来すると言えるのかを検証する。ま

ず、現代の剥奪説とネーゲルの死の悪の議論を比較し、その差異を整理する。具体的には、(1) 何を剥奪とみなすのか、(2) 死を常に悪いものとみなすかどうか、(3) 死の悪をいかなる種類の悪として構想するか、(4) 悪のタイミングをどう理解するか、という点を中心に考察する。さらに、ネーゲルの見解を現代的に定式化すると、どのような理論が導かれるのかを明らかにする。